

月報しんわ

総合版

令和6年度
特集号
社会福祉人
進和学園

www.shinwa-gakuen.or.jp/

能登半島地震について

令和6年穏やかな元日の夕刻16時10分に発生した地震は、マグニチュード7.6で最大震度7、石川県珠洲市内を震源とする内陸地殻内地震でした。犠牲になられた方々、被災された方々に心よりお悔やみとお見舞いを申し上げます。

この地震を受けて神奈川県知事、施設団体連合会は、北陸地区知的障害者福祉協会の要請と日本知的障害者福祉協会との連携で、応援職員の派遣を検討。役員5名が事前調査4/19～22に出向き、全壊全焼した多くの建物に衝撃を受け、現地のニーズを把握した結果、能登町の入所施設「日本海倶楽部」と輪島市の就労支援事業所「輪島カブーレー」及び仮設住宅の2方面に応援職員の派遣を決定。ベースになる宿泊先は連合会役員のご縁から和倉温泉のホテルを確保。応援職員は神奈川県内の法人・施設に呼びかけ第1陣から第12陣まで5/12～8/3までの3ヶ月間で50名の派遣が実現。2方面を2名ずつ計4名で1週間サイクルで応援。この度の応援で考える意味は、被災地支援と共に神奈川県で発生した場合にご本人の命と地域をどう支えるかということです。

能登半島地震の災害派遣を通じて

サンシティ 市川 歩

この度の石川県能登地方を震源とする地震により被害を受けられた皆さまに、心よりお見舞い申し上げます。

私は、被災地応援職員として、第1陣（5月12日～18日）、第7陣（6月23日～29日）の二度に渡り石川県輪島市を訪問しました。輪島市内に入って、お正月にテレビ中継で見た光景と変わっていない状況に驚きました。まだ重機も入っておらず、手作業で片付けを進めています。建物が崩壊している光景は衝撃的でした。

私は青年海外協力協会という団体の活動に参加して、仮設住宅で生活してい



震災から半年経ってもまだ車が片付けられていない状態。

る方の困りごとや状況を確認すること、二人一組で1日数件の家庭を回りました。これは、行政が孤独死を無くしていくことを目的にしています。

仮設住宅の標準の間取りは、約6畳の部屋に家具・家電、ユニットバスが備えつけられていますが、二人で住む場合は布団二枚を並べられないくらいに非常に狭い間取りです。地域によつては20～60棟の仮設住宅があり、地域まとまって入居しているためお互い顔見知りの方もいらっしゃるようですが、日中の在宅者は高齢者が多く、集いの場所等がなくなると仮設住宅内で過ごすしかないため、元気がない方が多くいらっしゃいました。



団地の仮設住宅が並んでいる様子。住宅の敷地面積は、世帯人数により異なる。（写真左は案内図、写真右は仮設住宅）

家庭訪問をする中で状況を伺うと、ほとんどの方が「大丈夫」と答え、困っているという声が少ないため、日常会話から話を上げると次第に「崩壊した自宅の解体が進まず、次の生活の計画を立てることができない」「畑に行けない」などの困りごとを聞き出すことができませんでした。問題を解決することはできませんでしたが、話を聞いて「すっきりした」と言われて嬉しかったです。

第7陣の派遣では、5月の時点よりも復興が進み、重機が入っていない場所にも重機が入り、希望が見えました。しかし、その反面で崩壊かけた建物が更に倒れている光景もあり、胸が痛くなりました。私は東日本大震災の時にも同連合会を通じて災害派遣に行きましたが、その時と比較すると、能登半島地震では物資の調達が多く、仮設入居者を地域でまとめるなど対策が行き届いているように思いました。二度の災害派遣を通じて、防災の意識が高まり、家庭での防災用品の見直しの必要性や日頃からの対策が命を守るうえで、いかに大切かを学びました。特に断水の影響で水がなくなるので、雨水タンクや水の貯蓄は大切だと思いました。



7月の第7陣派遣の時には重機が入っていた。

能登半島地震の災害派遣を通じて

サンメッセ 島 義信

このたびの能登地方を震源とする大規模地震により犠牲となられた方々に心よりお悔み申し上げるとともに、被災された方々に心よりお見舞い申し上げます。被災地域のみなさまの安全確保、そして一日も早い復旧・復興を衷心よりお祈り申し上げます。

私は被災地応援職員として第5陣（6月9日～15日）まで石川県能登町にある、障害者支援施設「日本海倶楽部」（社会福祉法人佛子園）の応援に行きました。日本海倶楽部は障害者施設とピアレストラン、就労継続支援事業所A型・B型が併設されているファーム、グループホームが併設された大きな施設で、30～50名の生活介護の利用者が生活しています。



写真：日本海倶楽部（社会福祉法人 ぶっしえん 佛子園が運営）震災前は障害者や地域の住民、高齢者が集う施設だった。

心配はありませんでしたが、震災直後、11名在籍していた職員の内半分が退職してしまい6名で支援をしていました。自身も被災し、家族が怪我をしていたり、家を守るために一時的に出勤できないのならば戻ってきてくれることが期待できますが、退職は想定外で、残った職員は心が折れてしまっていました。それぞれの理由があるので致し方ない部分ではありますが、その状況に驚きました。岐阜、福岡、長野からの災害派遣や、法人内の別の事業所からも同施設へ応援に駆けつけていました。私は主に日常補助（職員補助）を担当し、利用者一人一人の把握（施設内の同行）をしました。初めての場所ですべて初めて会う利用者の支援は、適切な距離感が難しかったのですが、長年の経験を生かしながらおこないました。

支援の空いた時間に珠洲市を訪問した際、被害の大きさに絶句しました。珠洲市は内海のため、住民の方々は、津波は来ないだろうと思っていたようですが、今回の地震では津波の被害や液状化現象により、道路が波打ち、マンホールが飛び出し、家屋が崩壊している光景が



漁船が津波で打ち上げられたまま残っている。（珠洲市）

ありニュースであまり目にしたことがない光景に衝撃を受けました。橋が隆起している場所の上に新たな橋が架けられ復興は着々と進んでいますが、家屋やビルなどは半年経過しても片付けが進んでいない状態が続いています。家屋の形は残っていても、中は雑然とした状態になっていたこともあり、一刻も早く復興が進むことを願うと共に、機会があればまた被災地の力になりたいと思っています。



車内から見た珠洲市の様子。震災から半年経っているのに変わらない状況。

神奈川県は南海トラフ地震や首都直下型地震の被害を受ける可能性があり、利用者ばかりでなく、職員が被災し、人員不足になることが想定されます。人員不足の中で退職者を増やさないためにも、日頃の職員間のコミュニケーションを大切に、いざと言う時に離職に繋がらないよう基盤を作り災害に備えることが必要だと改めて感じました。今回の経験から学んだことを進和学園として生かしていくために、法人、各施設で共通認識を持つて対策を考えていきたいと思います。

防火管理者会より

あさひホーム 藤川 浩児

各地を襲う自然災害の猛威は皆さん知るところだと思います。東日本大震災以降、地震や豪雨、土砂災害などの自然災害や世界中で猛威を振るった新型コロナウイルスの流行など、今後も日常に大きな影響を与えている災害が続きました。

これらの災害で被害を受けた際、本来施設で行うべき支援が通常通りには行えなくなってしまう可能性があります。施設利用者ご本人にとつて生活の場である以上、命を守るために必要な支援を保証し、皆さんの安全と安心を確保する必要があります。そのため進和学園ではBCP（業務継続計画）を次の通り策定しました。

BCPとは災害時に行うべき事柄、必要な業務の優先度を設定し、通常通りに行えなくなつた支援をどのように維持・再開するかを明確に定めておくものです。具体的な方法を予め設定することで、災害時に混乱なく業務を展開できるように職員への行動の指針となります。防火管理者会では、地震や風水害を含めた自然災害編のBCPを策定しました。また、新型コロナウイルス、インフルエンザ、食中毒を含めた感染症編のBCPも策定しました。

災害を想定した訓練は各施設で行われていると思います。近年の災害は「想定外」という言葉がよく聞かれています。BCPや備品など災害時の準備は行っていますが、想定外を想定した一人一人の日常の心掛けが、防災・減災活動ではとても重要になります。